

韓国の名誉革命はいかにして成功したか

韓基徳(NPO 法人 三千里鐵道)

キーワードは記憶

80年5月の光州民衆蜂起とそれに対する韓国軍部による無慈悲な血の弾圧は、79年10月26日に親日従米軍事独裁者、朴正熙が金載圭 KCIA 部長に射殺されたことによってもたらされた『ソウルの春』が、再び軍部によって圧殺されたことを意味した。朴正熙を父と仰ぐ全斗煥によって維新体制は維持され、70年代に培われてきた韓国の民主化運動を根絶やしにするための大弾圧が継続された。

この冬の時代において、光州を記憶し語り継ぐことが民主化運動の命脈をつなぎ、光州精神を引き継ぐことがすなわち民主化運動となった。この過程において、在日韓国青年同盟東京本部が光州民衆蜂起直後に作成した写真パンフ『闘う光州』が大きな役割を果たした。83年になって、韓国初の公開的社会運動団体である『民主化運動青年連合』が『民主化への道』という機関誌が登場した。それは全斗煥打倒という明確な道標となった。民主化運動青年連合の初代議長であった金槿泰は捕えられ、電気拷問、水拷問をはじめとしたありとあらゆる拷問を受け獄に捕らわれたが、民主主義を求める韓国民の民主主義への渴望はひるむどころか、火に油を注ぐ結果となった。そして87年6月の巨大な民主化運動へと繋がった。

この民主化運動を語る時には二人の大学生の死の記憶が不可欠だ。87年1月に金槿泰と同じ南営洞の対共分室で拷問致死したソウル大生の朴鍾哲と、6月のデモの際に催涙弾の直撃を受けて死んだ延世大生の李漢烈だ。

金槿泰や朴鍾哲のみならず、おびたしい学生、労働者、活動家が拷問された南営洞の対共分室は、2005年に、『警察庁南営洞人權センター』として生まれ変わり、写真や当時の新聞、様々な資料が展示され、拷問室も再現されている。また金槿泰の逮捕・拷問の過程は、『南営洞 1985』という映画となり2012年に上映された。

光州民衆蜂起は、95年に『5.18 民主化運動などに関する特別法』が制定され、光州 5.18 民主公園が造成され、犠牲者の墓地の聖域化が図られた。97年には『5.18 民主化運動記念日』という国家記念日となり、以降毎年、政府主管による記念行事が開かれている。また、2007年に『華麗なる休暇』という映画となった。

歴史をさかのぼると、1948年の済州四・三事件は、

2003年に盧武鉉大統領が公式に謝罪し、2006年の犠牲者慰霊際に参加し島民に直接謝罪を行い、2008年に済州四・三平和記念館が開館した。

朝鮮戦争のさなか、1951年に起こった居昌良民虐殺事件については、居昌事件追慕公園が2004年に竣工し、小学生や保育園児の遠足先となっている。

2009年5月23日に非業の死を遂げた盧武鉉大統領の葬儀は国葬の格下の国民葬であったが、死亡以降、遺体が安置された烽下の村には100万人を超える人々が弔問に行き、慶福宮で行われた告別式の後にソウル広場で行われた路祭(路上での祭祀)にも数十万人の群衆が参加した。そして烽下の村に帰って埋葬された後も、そして今も全国各地から多くの人々が弔問に訪れている。

沿道に張られたおびたしい数の黄色の横断幕に書かれていた言葉は、『忘れません』『記憶します』であった。

2014年4月16日に起こったセウォル号沈没惨事においては、韓国の人々はやはり『忘れません』『記憶します』という言葉とともに真相究明の闘いを挑んだ。遺族はその無念ゆえに断食闘争をはじめ、ありとあらゆる闘いを継続した。犠牲者の大半が修学旅行に行く高校生であったが、その壇園高校がある安山市には合同焚香所が設置されていて、今も弔問客が絶えない。他校の高校生が先生の引率でやってきたのを見て、私は涙をこらえられなかった。ソウルの中心である光化門にも犠牲者遺族と市民が焚香所を設置し座り込みを続けている。沈没地点にほど近く、犠牲者が引き上げられた珍島彭木港には遺体未収家族がコンテナハウスで起居しながら子どもの帰りを待ち続けていた。ここにも全国から多くの市民が弔問と慰問に訪れている。これらの現場に張られた数多くの横断幕のキーワードもやはり『忘れません』『記憶します』であった。

朴槿恵大統領弾劾という形で完成されたろうそく名誉革命は、引き金となったのは『チェスンシルゲート』であったが、血一滴も流すことなく完遂できた力は、『忘れません』『記憶します』という決意を込めた言葉の力が、数十年にわたって巨大な民衆運動力量を培ってきたからだろうと私は思う。

祝祭であり、民主主義の学校であった光化門

私はこのろうそく名誉革命の過程で、二度訪韓し集會に参加している。11月26日と2月25日の集會だ。100万人という群衆に抱かれた体験は生涯の宝物だ。

それは祝祭であった。人々は勝利の確信に満ちてい

た。初期の頃にこそ機動隊との小競り合いもあったが、人々は持久戦の覚悟を決めていたから、無理な衝突は避け、一人でも多くの人々が集会に安心して参加できるように努めていたようだ。ステージでは有名な歌手やMCが参加者を沸かせていた。自由発言では中学生からおばあさんまで、自分の思いのたけを話していた。小中学生の子どもを伴った家族連れ、カップル、学校の友だち同士…。いわゆる運動圏の団体に属する活動家だけではなく、無所属市民の大量参加が実現されていたのだ。

この運動をリードしたのは、『朴槿恵政権退陣国民緊急行動』という団体だった。これは、初期においては、参与連帯、民主労組などの団体が中心となっていたが、環境運動団体や宗教団体をはじめ、草の根のおびただしい団体が参加し、2500 団体を数えるまでに膨れ上がったという。会議には 100 名以上が参加し、5 名の実務責任者と約 100 名の実務スタッフがその合意事項を実行していったのだという。ここで重要なことは多数決を採用せず全員一致を原則としたことだという。活動現場も運動経験も運動の進め方も違う人々が会議をし、そこにはいない無所属参加者のことを考慮しながら、互いに譲歩し、広場に参加したみんなが合意できる要求やスローガン、集会デモの内容を作っていたとのことだ。そして集団知性が出現したのだと。これはそのまま、民主主義の学校だったのでないかというのが参加した人々の評価だった。

文在寅大統領が誕生して間もない 5 月 27 日、私は出張でソウルに行った時に、釜山で高校の教師をしている友人が全教組の集会でソウルに来るので、私も参加することとした。そこで私は、韓国の運動がどのように作られてきたかを目の当たりにすることとなった。

全国から集まってきた 1000 名ほどの集会であった。労組員のグループがステージで、♪教師を聖職者と呼ばないで 私たちは労働者です♪という歌を歌い参加者が呼応する、地域ごとに参加者が紹介されアピールを行い、自由に発言する時間が用意され熱誠的な発言をし、委員長は理路整然と演説を行い、蛇腹になっているスローガンカードは拍手のたびに大きな拍手となり、ウェーブが力強く伝播していく…。

この日、全教組に 16 番目の支部が誕生した。なんと退職教師たちの支部なのだ。28 年前に結成した時の一人が壇上に登り全教組結成の意義を語ったのだ。そう、こうして記憶が継承されていくのだ。

海南から 7 時間かけてやってきた退職間近の教師が

言った言葉が忘れられない。「私たちの力で、文在寅大統領を歴史に残る大統領に作ろう!!」

歌が持つ力

先に、光州を記憶し語り継ぐことが民主化運動となったと書いたが、そこでも歌の持つ力が絶大であった。70 年代に学生街で始まったフォークの伝統は『朝露』その他の不朽の名作を生みだしていたが、80 年代中ごろに爆発的に成長した民衆歌謡と呼ばれる歌は、光州を記憶し語り継ぐにとどまらず、労働現場や社会の不条理を歌い、分断の悲劇や統一への希求をうたった。韓国の民衆運動の現場には常に闘う歌が存在し続けていたのだ。人々はともに歌うことで決意と団結を固め、闘志を奮い立たせてきたのだ。

ろうそく名誉革命の現場にも、実に多くの歌が存在していた。次から次と新しい歌が作られ歌われた。その中でも代表的な歌は、次の二曲だっただろう。

《暗闇は光りに勝つことはできない》

- ♪暗闇は光りに勝つことはできない
- ♪偽りは真実に勝つことはできない
- ♪真実は沈没しない
- ♪私たちは放棄しない

この歌は、セウォル号沈没惨事の真相究明を求める闘いの中で生まれた。この短い歌詞に私は韓国民衆の正義は必ず具現化するのだという信念と、そのための荘厳なる闘いの決意を見る。

《憲法第一条の歌》

- ♪大韓民国は民主共和国である。
- ♪大韓民国の主権は国民にあり、
- 全ての権力は国民から出て来る。

憲法第一条の第一項と第二項を繰り返し歌うのだが、たぶん、全国の小中学生の大半もこの歌を歌って覚えただろうと思われる。ろうそく名誉革命の成功のカギがここにもあるのだ。つまり、確固たる主権者意識だ。この歌は今後の韓国の民主主義を継続して発展させるうえでますます大きな役割を果たすだろうと思う。

文在寅大統領は就任後の演説や人事で私たちを感動させ、今や 8 割を超える支持率を維持している。しかし、私が心配していたように政策に曖昧さも目立ってきた。韓国の民衆は、ろうそく名誉革命の果実として文在寅大統領を選んだその責任からも文在寅大統領を歴史に残る大統領にしようとしているが、文在寅は決して安泰ではない。主権者意識が確固たる、世界で最も恐ろしい民衆がいるからだ。